

被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁

震災の伝承と追悼・鎮魂の場

福島県復興祈念公園

岩手県立図書館「I-ルーム」

岩手県立種市高等学校

伝承ロードをゆく 第9回 宮城県大崎市・石巻市

宮城県亘理町

ないわん



震災伝承看板「支援物資輸送を確保した
航路啓開（仙台塩釜港）」（仙台市）

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構

震災の伝承と追悼・鎮魂の場

福島県復興祈念公園

今年5月に双葉町と浪江町にまたがる沿岸部に全面開園した「福島県復興祈念公園」は、国と福島県が連携して整備した公園です。「高田松原津波復興祈念公園」(岩手県)と「石巻南浜津波復興祈念公園」(宮城県)に続く、国営追悼・祈念施設を有する被災3県で3力所目となる東日本大震災の復興祈念公園であり、震災による犠牲者への追悼と鎮魂、記憶と教訓の伝承、そして地域の再生を見守る重要な拠点となります。

国と県が共同で事業を行うにあたり計画段階から密に調整を重ね整備が進められました

「福島県復興祈念公園」は双葉町と浪江町にまたがる約46haの敷地に整備されました。「生命をいたみ、事実をつたえ、縁をつなぎ、息吹よみがえる」を基本理念に掲げ、公園のほぼ中央には中核施設となる「国営追悼・祈念施設」を配置。「中野地区集落」「両竹地区集落」「多目的広場」「さくらの丘」「だんご山」「水辺の広場」の7つのエリアで構成されています。多目的広場から追悼施設までのエリアは1本の園路で結ばれており、自分のペースで歩きながら震災の記憶と向き合い、祈りを捧げることが出来ます。「中野地区集落」と「両竹地区集落」は前田川を挟んで隣接し、震災前はそれぞれ20世帯以上が暮らす集落でした。

しかし、押し寄せた津波により家は流出。さらに原発事故に伴う避難を余儀なくされ、多くの住民が元の場所で暮らすことが困難となりました。この地の歴史や失われた暮らしを後世に伝えるため、かつて生活道路として使われていた道の一部を保存するとともに、集落の跡を盛り土で表現。「人々が暮らしていた証」を残す工夫が施されています。

丘の上に献花台を配置

「国営追悼・祈念施設」は震災と福島第一原発事故による犠牲者の追悼・鎮魂を目的に国が整備しました。

施設は緑に包まれたなどらかな丘の形状をしており、中に入ると福島県産材を使った木

の温もりを感じる空間が広がります。奥へ進むと静寂に包まれた暗い通路が続く、その先に大きな水盤を配した吹き抜けの空間が出現。空から差し込む光や鳥のさえずりに包まれながら、犠牲者へ思いを馳せられるよう設計されています。さらにらせん状のスロープを上り、次第に明るさの増す長い通路を通ると、海を見渡す広場に出ます。南側には献花台が設けられ、ゆったりした時を過ごせます。

「福島県には、震災による犠牲者を追悼する象徴的な場所がこれまでありませんでした。この施設が、それぞれの思いで祈りを捧げられる場になれば」と国土交通省東北国営公園事務所長の岩崎健さん。国営追悼・祈念施設と管理棟は午前9時～午後5時開園。火曜休園(祝日と11日は開園し翌平日休園)。



未曾有の複合災害 記憶つなぐ

国土交通省東北国営公園事務所の長岩崎健さん 福島県相双建設事務所の長佐藤敬さん

公園整備に当たっては2014年に「東日本大震災における追悼・鎮魂等の施設検討プロジェクトチーム」が設置され、翌15年に候補地を双葉・浪江両町にまたがるエリアとすることが決まりました。

た複合災害を経験した地域であることが候補地となった大きな理由の一つでした」と話します。

また、佐藤さんは、福島県相双建設事務所復旧・復興部長として、中野地区に整備が進められていた復興産業拠点の形成に向けた基盤となる、県道井手長塚線・長塚請戸浪江線復興シンボル軸の道路工事を担当。工事が起工した18年当時

岩手、宮城両県の復興祈念公園は2021年に開園しましたが、福島県では原発事故の影響で整備に時間を要しました。加えて今も続く復興の歩みを伝える公園として計画されたことから、19年7月に造成工事に着手し、約7年の歳月をかけ今年5月に開園し

るフィールドワークが行われ、語り部の案内で園内の中野・両竹地区集落などを巡りました。参加者からは「知識として学だけでなく、自分の足で歩いたからこそ感じられるものがあつた」との声が寄せられたといひます。

「献花台がある丘からは、津波をもたらしした太平洋や福島第一原発の排気筒、津波被害を受けた浪江町立請戸小学校、さらに復興が進む産業団地や営農を再開してゆく水田までが一望できます。災害の起因となった方向や震災遺構、そして復興へ歩む地域の姿を一つの風景として見渡せます。この景色を通して、震災から復興までの歩みを感じてほしい」と岩崎さん。

開園に先立ち25年2月から6回にわたり地域住民らが参

公園との関わり育む

7月5日、隣接する「東日本大震災・原子力災害伝承館」との連携企画で、開園後初とな



写真左から佐藤敬さん、岩崎健さん



献花台に供える花は「国営 追悼・祈念施設」の受け付けでも購入できます



「国営 追悼・祈念施設」と「東日本大震災・原子力災害伝承館」を結ぶ橋。伝承館で震災や原子力災害について学び、追悼・祈念施設で祈りを捧げる一連の体験ができます



震災前の家屋があつた位置を盛り土で示した「両竹地区集落」。「植栽ワークショップ」も不定期で行われています

加する「植栽ワークショップ」が開催されました。震災前に親しまれていた風景や草花に思いを寄せながら花壇づくりに取り組み、公園への関わりを育んできました。管理棟には多目的に使える会議室もあり、今後、地域交流の場となることが期待されます。

「福島県復興祈念公園は、あえて作り込み過ぎず、伝承館などで見聞きたことを思い返し、一人一人が震災と向き合う場として整備しました。震災を知らない世代にとつては少し難しく感じる場所かもしれないですが、災害は誰にでも突然降りかかり得る。その事実や、困難を乗り越えようと復興の歩みを進める福島を、公園を通して未来へ伝えていきたいです」と岩崎さんは話します。

思いを
《発信》

防災と震災伝承 県都に拠点

岩手県立図書館「I-ルーム」

岩手県立図書館の一角に、東日本大震災の伝承や復興、防災の学びの場を提供する「I-ルーム」があります。盛岡市にある県立図書館として、県内外を問わず興味のある幅広い世代に広く活用してもらおうと、書籍や資料の充実に加えてワークショップの開催にも力を入れています。

同館は「キオクシア アイーナ（いわて県民情報交流センター）」に移転し、今年で20周年を迎えました。盛岡駅西口そばという立地の良さから多くの県民が来館。3、4階が一般に開放され、総蔵書数は閉架分も含めると約85万冊を数えます。

震災後、岩手県では復興や防災の教育に力を入れ、同館も関連する図書や資料の収集に取り組んできました。震災や防災の学習拠点を県都に設け、県内の震災伝承施設とのネットワーク化も目指そうと23年11月、4階にI-ルームを

開設。翌年には第3分県の震災伝承施設に登録され、その後担当課のふるさと未来課が創設されました。

名称の「I」には学び合い、出会い、I（I）w（w）a（a）t（t）e（e）などさまざまな意味が込められています。

森本晋也館長は「県内の関連施設との連携、復興教育の探究的な学びの支援、自然災害や防災・安全を総合的に学ぶ拠点という主に三つの役割があります。セミナーやワークショップも積極的に開催しています」とアピールします。

森本館長は長年、岩手県公立中学校の社会科教員を務め、防災教育にも取り組んできました。震災時、中学生が小学生の手を引いて山に避難したことで知られる釜石市鵜住居地区の釜石東中学校に、森本館長が震災前勤めていた時の生徒で、今は同地区にある「いのちをつなぐ未来館」のスタッフの川崎杏樹さんも、I-ル

ムのイベントやセミナーなどに協力しています。川崎さんも震災時に避難した中学生の一人でした。

貴重な資料も保存

ルーム内の図書と映像資料は、それぞれ「東日本大震災」「自然災害」「防災」の3コーナーに分類。図書は児童書から専門書まで幅広く取りそろえています。特に貴重なのは震災時の資料や関連チラシを保存したファイルがずらりと並んだコーナーです。

ファイルは沿岸部を中心に県内各自治体や経済、社会、教育、ボランティア活動などと分類されています。罹災証明の申請書、ボランティアの募集や利用案内のチラシなど、用が済めば捨てられそうなものだからこそ保存に努めたそうです。

県内各地の中学生が来館してのワークショップでは、ハザードマップを踏まえて付与



「I-ルーム」でワークショップに取り組む中学生



森本館長は「盛岡駅のそばにある当館が、沿岸部に足を運んでもらうためのサテライト機能を発揮できれば」と話します。今後は沿岸での出張セミナーなども予定しています。

「岩手大学教育学部の集中講義の場や、いわて防災復興研究会の活動拠点にもなっています」と森本館長。書棚やテーブルなどは県産木材を使用

津波の怖さ 小中生に教える

岩手県立種市高等学校

岩手県立種市高等学校(洋野町)は全国唯一の潜水士養成学科「海洋開発科」があることで知られます。同科の3年生が学んだ知識や技術を生かし、近隣の小・中学校に出向いて実験を通じ児童・生徒に津波の仕組みや速さを教える「津波防災出前授業」を実施。東日本大震災の記憶がない世代が、さらに年下の世代に地震や津波への備えと防災の大切さをつないでいきます。

同校の本年度の全生徒数は普通、海洋開発の両科合わせて71人。隣接の青森県や、全国から受け入れる「いわて留学」の生徒もいます。菊池平校長は「潜水士は港湾土木や沈没したものを引き上げるサルベージなどに従事する。海がフィールドですが、工業系の学びです」と強調します。震災後も海洋開発科の生徒は実学を兼ねて、町内の栽培漁業施設から海に流出したがいき撤去に当たりました。

津波防災出前授業は2014年度、同校と東京大学海洋アイアンズ海洋教育促進センターとの連携協定がきっかけにス

タート。ポンベの圧縮空気で波を起こす津波発生装置を作り、改良を重ねて小・中学生が理解しやすいようにしました。

同科3年生は本年度12人。このうち江莉宏太さん、嵯峨昌齊さん、平岡羅夢さん、山下寛渚さん、山下彪さんの5人が課題研究として津波防災出前授業に取り組んでいます。洋野町立種市小学校での授業には同校3、4年生の計20人ほどが参加しました。

海が深いほど速い

高校生5人は装置を使い、水深が6センチと10センチの津波の速度

の違いを教えました。児童たちがポンベの開栓やストップウォッチでの計測、速さを割り出す計算に参加し全員、興味津々の様子。1秒当たりで水深6センチだと0・77メートル、10センチでは1・18メートル進むことが分かり、津波は海が深いほど速まることを学びました。

質問タイムでは高校生からの「地震が来たらどうする」「外にいるとき、津波が来たら」の問いに児童たちは元気に手を上げて正解を言い当てました。宿戸小の荒川守校長は「3、4年生は総合学習で『ひろの学』として海や津波を学んでいます。地域の協力をいただいております。高校生による授業も児童は身近に感じたと思います」と話します。

高校生5人は「本年度2回目の授業で、前回よりさらに分かりやすく発表できたと思います。今後も練習を重ねたい」と張り切ります。菊池校長も「伝承や防災の活動がこれまで以上に重要。高校生ならではの発信力で、地域とのつながりを大切にしてほしい」と語ります。



小学生も実験に参加して津波の速さを学習



種市高校の潜水実習棟で技術を学ぶ海洋開発科の生徒

3・11伝承ロード推進機構 震災伝承施設紀行

伝承ロードをゆく

第9回 宮城県大崎市・石巻市

取材／一般財団法人3・11伝承ロード推進機構 石森 智佳



石巻湾を臨む防潮堤の上で東部土木事務所の石達直樹副所長(写真左)に話を聞きました

一般財団法人3・11伝承ロード推進機構の職員が東日本大震災の教訓・伝承を後世に伝える「3・11伝承ロード」をたどり、震災伝承施設を取材する連載企画の9回目。今回は宮城県大崎市・石巻市を訪ねます。

内陸被災の状況を記録

東日本大震災では津波の被害の大きかった海岸沿いはもちろん、内陸部でも多くの被害がありました。最大震度6強の強い揺れのあった宮城県大崎市の河川堤防では地盤の液状化や亀裂などが発生。地盤の改良とともに災害に強い安全な堤防を造り直す復旧工事が行われました。

当時の被害状況と復旧工事の概要を後世に伝えるため、荒雄水位計測所に設置されたのが「江合川内陸部 復旧・復興の概要看板(右岸26・5



「震災伝承施設」とは?

東日本大震災の事実や記憶、経験を伝承する「3・11伝承ロード」を構成する施設で①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当することが条件。①～⑤1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったりと、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりといった来訪者の理解しやすさに配慮している施設を「第3分類」としています。

「(地図1)」。傍らには当時の大崎市長により揮毫された「復興」の記念碑が立ち、震災伝承施設第1分類に指定されています。

案内していただいた北上下流河川事務所土岐副所長、同高橋伸忠管理課長、大崎出張所菅原満所長によると、当時の北上川・鳴瀬川水系の被災施設は861カ所。これらの改良・復旧は、その後の大雨、洪水などの災害から街を守る減災、レジリエンス向上にもつながっています。

こうした記念碑や説明板は、大崎市の他、石巻・登米・東

松島・松島・大郷・涌谷・美里の3市4町の河川堤防にも設置されているそうです。

「避難」前提の津波対策

石巻市 渡波にある高さTP+7.2メートル、延長970メートルの長浜海岸防潮堤は、震災の教訓を踏まえ宮城県が手がけた津波防災インフラとして最も早く完成した沿岸防護施設の一つです。防潮堤の役割や位置付け、県の津波防災対策について周知しようと「3・11東日本大震災伝承板ー長浜海岸防潮堤ー」(地図2)が設置されました。

この伝承板で目を引くのが「まずにげよう たいせつなのは、そのいのち」という標語。

宮城県東部土木事務所の石達直樹副所長によると、地域



復旧・復興の概要看板を見学(写真左から石森、北上下流河川事務所高橋伸忠管理課長、土岐範彦副所長、大崎出張所菅原満所長)



雄勝町名振新生会会長
高橋守次さん(写真右)

「昭和8年3月3日大震嘯災記念碑」のあった「名振老人憩の家」はもともと小学校だった場所。記念碑に刻まれた「地震があつたら津波の用心」という言葉を子どもの頃から見ていました。

雄勝町は震災の津波で壊滅的な被害を受け、名振地区でもほとんどの住宅が流されて2名の方が亡くなりましたが、子どもの頃からの教訓で「みんな逃げろ」と誘導しあって多くの住民が避難することができました。

地域に残った人たちは今、平均年齢70歳を超えていますが、この教訓が後世にも伝わるように願っています。



東日本大震災の津波到達地点にも案内していただきました

- 1 江合川内陸部 復旧・復興の概要看板
(右岸26.5k)(宮城 第1-060号)
宮城県大崎市古川福沼地内
- 2 3.11東日本大震災伝承板
ー長浜海岸防潮堤ー(宮城第2-004号)
宮城県石巻市渡波地内
▶当伝承板の内容は右記QRでPDFをダウンロード可能
- 3 昭和8年3月3日大震嘯災記念碑
(宮城 第1-012号)
宮城県石巻市雄勝町名振字東12-49



▲「昭和8年3月3日大震嘯災記念碑」の隣にミサワホームやワイズメンズクラブ国際協会によって設置された3.11の碑が設置されています

▶かつて「昭和8年3月3日大震嘯災記念碑」が立てられていた名振老人憩の家跡。津波によって記念碑も倒れてしまい、その後現在の場所に移されました



長浜海岸防潮堤が目指したのは、想定を超える津波や高潮が堤防を越えてしまっても避難時間を少しでも長く確保できる「粘り強い防潮堤」。背後には防災緑地や避難タワー、かさ上げされた道路などが配置され、石巻市のまちづくりと一体となった多重型津波防災対策が図られています。

石達副所長は「防潮堤を過信せず、地震が起きたら速やか

に逃げることを皆さんに知っていただけなら」と呼びかけています。

昭和の教訓を後世に

1933年の「昭和三陸地震」による津波被害を後世に伝えるため、宮城県や岩手県など沿岸部各地に建立された「昭和8年3月3日大震嘯災記念碑」(地図3)。石巻市の名振東団地にその一つがあり、震災伝承施設第1分類に指定されています。

雄勝町名振新生会会長の高橋守次さんによると、当時朝日新聞に寄せられた現在の価値に換算して5000、6000万円の義援金を基に造られたのが、この記念碑。もともと漁港近くの「名振老人憩の家」前にありましたが、津波で押し流され、石巻市雄勝町名振地区の住民たちが防災集団移転促進事業により高台

の団地に移った際に、一緒に現在の場所に移されました。

震災後、高橋さんは「昭和8年3月3日大震嘯災記念碑」とほぼ同じ海抜の住宅跡から、「地震があつたら津波の用心」という同じ教訓が刻まれた別の石碑を発見。「おそらくどちらの石碑も当時の津波到達地点だったのでは」と推測します。

漁港を望む高台の公園に移された記念碑の傍らには現在、「未来につなぐ命」の言葉とともに、高台に駆け上がる少女の姿がデザインされた3・11の碑も設置されています。



住宅跡で発見された「地震があつたら津波の用心」の教訓が刻まれた石碑

被災乗り越え
まちづくり

記憶と教訓、心に残そう

宮城県亶理町

亶理町の被害状況

最大震度	震度6弱
建物全壊	2527棟
建物大規模半壊	286棟
建物半壊	924棟
建物一部損壊	2462棟
死者	306人
遺体未発見者	4人
負傷者	45人
救助者	2796人 (避難所からの救助含む)
※2020年12月 31日現在	

町域の大部分が平坦な土地で、県内でも温暖な気候に恵まれ、全国有数の「いちご生産地」としても知られる宮城県亶理町は東日本大震災の津波で沿岸部を中心に壊滅的な被害となりました。震災から15年が過ぎ、ハード面の復興事業はすでに一段落。産業や暮らしの充実に力を入れ、仙台都市圏の南を担う活力のある町を目指しています。



お話を伺った方
山田 周伸町長

震災では亶理町を含む仙台湾の砂浜海岸で最大10メートルを超える津波が襲来。同町の面積73・21平方キロ(当時)の約48%が浸水しました。常磐自動車道から海側の被害は深刻で、特に漁港や観光名所の鳥の海など

がある荒浜地区、その南の吉田東部地区などは甚大な被害となりました。

2018年に就任した山田町長は震災当時、家業のみそ・しょうゆ醸造元の代表取締役として多忙な業務をこなしていました。

「あの日は仕事で福島県の新地町や相馬市の沿岸部を回っていました。夕方から仙台で会合があったので、いつもより早く切り上げて自宅に戻って5分ぐらいで地震が発生し

ました」と山田町長。「1978

年の宮城県沖地震とは全く違う、長く大きな揺れ。あのまま福島にいたら、どうなっていたのか」と振り返ります。

町内の復旧・復興のハード事業は10年で完了。沿岸部は生まれ変わり、震災前とは異なる新たな景色が広がった一方で、沿岸部の人口減少が著しく震災前の半分ほどに落ち込みました。15年の歳月を重ね、家庭的な理由で高齢者を中心に戻りたくても戻れない人がいるようです。

山田町長は「町の人口は緩やかな下降線。ただ転入・転出による社会動態は維持してお

り、亶理地区や逢隈地区に手頃な建て売り住宅が多く、若年世帯が転入しています」と語ります。しかし平日は日中、人口3万2293人のうち約1万1000人が通勤通学で町外に出て、町内に入るのが約5500人。昼間人口の減少が日中の消費の減少にもつながっています。

車避難で新たな課題

震災は亶理町にとっても大きな痛手であり、町民は等しく苦しい思いをしました。「それでも前を向いて歩いていこう」という気概に満ち、町が生まれ変わるきっかけになりました」と山田町長。大規模な防災倉庫を設置したほか、避難道路となる町道も整備。以前と比べて沿岸部と中心部を結ぶ道路が増えました。

町では原則徒歩としながらも、車でない安全な場所へ移動できない住民に車避難を

促す津波避難計画を策定。避難道路の町道は4本ありますが、昨年7月のカムチャツカ半島沖地震で津波警報が発表された際は、県道塩釜亶理線に集中しました。

山田町長は「いつも使っている道路を通ったのかと思います。避難道路の分散利用など周知を図りたい」と話します。

企業版ふるさと納税を活用し、鳥の海公園の避難丘に昨年3月、「鎮魂と平和の鐘」を設置。震災犠牲者の鎮魂と平和への願いを込め、折り鶴のモニュメントとともに整備しました。山田町長は「ものとして残すだけでなく、心に残していくことも大切であり、鎮魂と平和の鐘をそのような場にしたい」と強調します。

若年世代へ震災の教訓を伝えるためにも町の総合防災訓練で、例えば中学生に避難所の運営スタッフとして参加してもらうなど、災害やコミュニケーションへの意識を促す機会にしたい考え。「語る、学ぶ」という伝承は学校や家庭でも行われています。訓練を経験の場にする事で震災はもちろん、さまざまな災害をわが事として捉えてもらえれば」と山田町長は期待を寄せます。



荒浜地区の「わたり温泉鳥の海」に押し寄せた震災の津波第2波(2011年3月11日16:02)

3.11以降の主な事業

いちご団地整備事業



いちご団地



東日本大震災の津波で大きな被害を受けた本町の特産品「いちご」の生産を復活させるため、被災地域農業復興総合支援事業を活用して町内3カ所に大型園芸施設を整備し、被災農家の営農再開を支援するとともに、生産担い手の育成を進め、品質・量ともに日本一のいちご生産地となることを目指しました。また、町の基幹産業である農業、その核となるいちご生産が発展することで、さらに活気ある町へとけん引してくれることが期待されます。

災害備蓄品 購入事業

各備蓄庫に避難運営上必要な備蓄品を整備しました。



購入した備蓄品と資機材

小中学校 改築事業

東日本大震災の津波で被災した^{ながとろ}長瀬小学校と荒浜中学校を改築しました。



ピロティ方式（※）で再建された荒浜中学校



新たに建設された長瀬小学校

※1階は主に柱だけで構成された構造

町道整備事業

（避難路の新設・整備事業、踏切拡幅事業など）



荒浜江下線



五十刈線

東日本大震災クラスの大津波から町民の尊い命を守るためには、防潮堤などの津波防御施設を整備するほか、避難ルートの確保や防災訓練の実施など、総合的な対策が不可欠です。震災発生時、幹線道路に避難車両が集中し渋滞が発生しました。町道整備事業では複数の避難ルートを確保し、既存道路の狭い箇所を拡幅する工事を実施することで、沿岸部から内陸部へ速やかに避難できるように新たな避難道路を整備しました。

防災拠点施設（防災倉庫）



防災拠点施設（防災倉庫）の内観と外観

町の中心部である公共ゾーンに整備され、災害時に必要となる災害用トイレ、発電機、毛布などの各種物資を備蓄・管理し、支援物資の受け入れと仕分けを行うための施設。内部には会議室なども備え、平常時においても防災関係の講習会や訓練といった啓発活動を実施することができます。



商業と観光の拠点 イベントにも積極的

ないわん

宮城県北東端に位置する気仙沼市は、太平洋に面した水産業が盛んな港町。中でも、魚町と南町を中心とした内湾地区は商業施設や住宅が集まり市内随一のにぎわいを見せていましたが、東日本大震災による津波で壊滅状態に。復興整備が一段落し、新たに建設された「ないわん」が商業と観光の拠点になっています。



「ないわん」は観光集客施設「迎」^{ムカエ}、気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ（ピアセブン）^{ウツレル}「創」、気仙沼スローストリート^{ユツメル}「結」、気仙沼アムウェイハウス^{ヒツメル}「拓」の4施設で構成。内湾地区の再生プロジェクトの一環で官民一体となって進めてきた事業です。2018年から19年にかけて段階的に整備され、20年7月にグランドオープンしました。

それに先駆け、運営を担う気仙沼地域開発がテナントの誘致を17年に始めました。気仙沼地域開発は市街地の活性に取り組む組織として1996年に設立し、震災後に復興まちづくり組織に再編。当初の社員はUターンした千葉葉裕樹さん一人でした。

「直接会って説明した方が分かってもらえる」と考えた千葉さんは、市内で営業を続けていた12カ所の仮設商店街を中

BLACK TIDE BREWINGが醸造する気仙沼発のクラフトビール



心に飲食や物販の217店を訪問して交渉。官民一体の事業とはいえ、なかなか賛同は得られませんでした。「塩をまかれたり、怒鳴られたりしたこともありましたが、気仙沼は食を中心とした都市づくりに力を入れていきますし、人を呼ぶには飲食店の充実が必須。一度離れた古里を知るためにも、顔を覚えてもらうためにも、昼に3食、カフェタイムを挟み、夜に2食平らげた日もありました。おかげで体重はだいぶ増えましたけれど」と苦笑し、振り返ります。

新旧のテナントが融合

鮮魚店、レストラン、カフェ、バー、ラーメン店、サメ専門店、雑貨店など個性豊かな20店舗がそろいグランドオープン。その中には、震災後に創

手前の建物が迎、奥が創。芝生が広がる南町海岸公園や、その奥にあるないわん広場とも隣接



業したテナントも。ブルワリー「BLACK TIDE BREWING」がその一つ。震災からの復旧・復興の一助になればと、2020年3月に拓でクラフトビールの醸造を開始しました。24年にビールフェス「KESENINUMA BEER FESTIVAL」^{ベア}を初開催し、25年10月に拓から結にタップルームを移転して交流の場を広げるなど、ビールを通して内湾地区のにぎわいづくりに貢献しています。

閉店を余儀なくされた店舗がある一方で、新たなテナントが仲間入り。地元建設会社^{ディーエムシー}が運営する「気仙沼DMC



インタビュー

気仙沼地域開発
総括マネージャー 千葉裕樹さん

1978年気仙沼市生まれ。大学卒業後、東京の広告代理店に就職。東日本大震災後にフリーランスになり、東京や静岡で広告のプロモーションディレクター業などを務める。2016年に気仙沼地域開発に就職、当時は唯一の社員として、内湾地区の商業観光施設のプロデュースを担当。

Uターンして転職。「ないわんを面白く」 9/21、22に音楽フェス初開催

3月11日は静岡県浜松市で仕事をしていました。駅ビルの19階にいて、浜松も結構な揺れでした。宮城が大変だと報道されましたが詳細は分からず、両親も心配で、その日に宮城に帰ることを決めました。公共交通機関は運休し、高速自動車道は通行止めで、知人に借りた車で下道を通り、13日に宮城に着きました。幸い両親は避難所に身を寄せていて、物資を置いて東京に戻りました。

2016年に後輩の結婚式で久しぶりに内湾地区を訪れ、復興工事が遅れているのを目の当たりにしました。震災前、気仙沼の人が「町へ行こう」といえば内湾地区の南町。さびしかった古里の姿に何ともいえない気持ちになりながら、私は東京や静岡で仕事を続けました。ある日、仕事の会食でおいしい料理を食べ、ふと「復興半ばの宮城で今、両親は何を食べているのだろう」と思い、地元に戻ることを考え始めました。そんなとき、気仙沼の会社が復興のために人材を探していると知り応募。運良く採用してもらえました。主な仕事はテナントの誘致。前職とは異なる業務に手探りの日々。コロナ禍とも重なりました。

ないわんがオープンして6年が過ぎました。気仙沼の人口は減っていますが、にぎわいを生み出すには集客が大切。そのためにも「ないわん朝市」「KESENNUMA BEER FESTIVAL」といったイベントを定着させたいです。26年9月21、22日には音楽フェス「KESENNUMA ISARIBI FESTIVAL」を初開催。気仙沼に来て良かった、住んで良かったと思ってもらえるように、ないわんを面白い場所にします。



①開催日は7:00にスタートする「ないわん朝市」。飲食屋台やキッチンカーが出店。農産物やハンドメイド品などの販売も ②気仙沼DMC KNEWSを運営する熊谷さん夫婦は「地元が元気になる観光コンテンツも企画しています」と観光案内以外の業務にも力を入れています ③ないわんオープン時から入居する「気仙沼生鮮館やまひろ」には地場の鮮魚がずらり ④はまらいんBOOKSオーナーの菅野さんは「読書会などイベントも行い、さまざまな方がつながるきっかけづくりができれば」と笑顔 ⑤「サメ専門店 SHARKS(シャークス)」ではサメ皮を用いた財布やポーチが人気

26年6月にはUターン者によるシェア型書店「はまらいんBOOKS」が開業。一般の人が出品した古本を中心に、個人で作る小冊子

KNEWSは土産店のチャレンジショップを経て、25年に民間の観光案内所を始めました。26年4月にはないわん内で移転して店舗を広げ、観光案内、ワークショップや体験ツアアの企画・運営、土産品の販売を行っています。



所在地／宮城県気仙沼市南町海岸
問／気仙沼地域開発 TEL0226-48-5091

気仙沼市の 震災伝承施設(第3分類)

- 唐桑半島ビジターセンター
気仙沼市唐桑町崎浜4-3
- リアス・アーク美術館
「東日本大震災の記録と津波の災害史」常設展示
気仙沼市赤岩牧沢138-5
- 気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館
気仙沼市波路上瀬向9番地1
- 気仙沼市復興祈念公園
気仙沼市栄町1外地内
- 命のらせん階段(旧阿部家住宅)
気仙沼市内の脇2丁目133-1

「ZINE」は手作り雑貨も扱い、地元客にも観光客にも新たな楽しみを提供しています。拓と結の間ある歩行者専用道「風待ち広場」、海に面したないわん広場や南町海岸公園

を会場に、多彩なイベントを実施。海を見渡せるデッキ、大島汽船の発着所、ラジオ局もあり、ないわんは商業と観光拠点であり、交流の場として重要な役割を担っています。



復興の“知恵”を未来へ 見やすい「新図録」発刊 冊子版の他、ウェブサイトで閲覧可能

一般財団法人3.11伝承ロード推進機構は、東日本大震災からの復興事業に込められた知恵や工夫を後世に伝える「復興事業新図録」を発刊しました。

震災から15年が経過し、被災地では多くの復興事業が完成しました。道路や堤防、住宅地などのインフラは地域の日常の風景となる一方、その整備に込められた工夫や、震災を経験したからこそ生まれたノウハウは、次第に見えにくくなっていきます。

図録では、津波避難場所としても機能した仙台東部道路、海との共生を目指した女川町のまちづくり、地域のにぎわいを生み出した石巻や関上のかわまちづくり、迅速な高台移転を実現した野蒜ヶ丘団地、復興を支えた三陸沿岸道路、先人の津波への備えが生かされた東北電力女川原子力発電所、そして大規模なかさ上げを行った陸前高田市など、七つの復興事業を写真や図を交えて分かりやすく紹介しています。

震災遺構や証言とともに、復興した町やインフラもまた、震災から得られた教訓を伝える大切な「教材」です。

ぜひ現地を訪れ、「なぜ、この道路はこの高さなのか」「なぜ、この町はこの形になったのか」という視点から、復興の背景にある知恵を感じてください。

Web版図録

HTMLコーディング レスポンシブ対応
PC・スマホ双方で閲覧しやすい構成



冊子版図録

A4仕上げ / 28ページ / カラー
復興インフラの価値を分かりやすく紹介



表紙

被災地を歩く

発災6日後に復旧果たす

仙台塩釜港(仙台港区)に面した約9㌔の敷地に野球場やテニスコートなどを設けた「NX仙台港パーク」がある。園内は芝生も広がり、海を見ながらのんびりできる場所となっている。天気の良い休日は家族連れでピクニックを楽しむ姿も見られ、誰もが気軽に楽しめる公園だ。

仙台港区も東日本大震災で甚大な被害を受けた港湾で、最大7.1㌔の津波を観測した。自動車やコンテナ、材木などが港内に流入、散乱し船舶の出入港が不可能に。支援物資や燃料の輸送ルートを早急に確保するべく震災直後から航路啓開を実施。海洋土木業界の協力で全国から起重機船が集結し、発災から6日後には第1船が入港。被災地へ非常食や支援物資が届けられた。

パークの中央からやや港寄りが高台で、仙台港区を一望できる

震災伝承看板「支援物資輸送を確保した航路啓開(仙台塩釜港)」(仙台市)

展望台の一角に「支援物資輸送を確保した航路啓開(仙台塩釜港)」と題した震災伝承看板が設置。看板には当時の取り組みを写真入りで紹介し、第2分類の震災伝承施設に登録されている。

復興を遂げた港は中国や韓国、ロシアとの国際コンテナ航路、京浜港経由の国際フェリー航路、苫小牧港や名古屋港を結ぶフェリー航路、関東や関西、北海道を行き来する内航RORO船航路があり、東北最大の物流拠点として位置付けられている。展望台は港を見渡しながら震災直後の苦勞しをのび、学ぶ場となっている。

